

障害児の母親における情報源の利用と評価

タネダ アヤ ナカシマ カズオ
種子田 綾*¹ 中嶋 和夫*²

目的 障害児通園施設を利用している母親を対象に、情報ニーズと情報源の利用および情報源の評価の関係を検討することを目的とした。

方法 調査は、S県とW県の障害児通園施設を利用する児の母親を対象として実施した。調査内容は、児の特性（性、年齢、療育手帳、障害者手帳）、母親の基本属性（年齢、児の数、家族構成、職業）、情報ニーズ、情報源の利用と評価で構成した。情報ニーズは、「The Family Needs Survey」のうちの情報に関連した7項目で測定した。情報源の利用と評価は、マスメディア4項目、障害児の療育にかかわりの深い専門家集団としてのパーソナルメディア5項目とそれ以外のパーソナルメディア4項目で測定した。統計解析では、情報源の評価に対する一次要因を情報源の利用、二次要因を情報ニーズとする因果モデルを仮定し、そのモデルのデータへの適合度を検討した。

結果 前記因果モデルのデータに対する適合度は、統計学的に許容される基準値を満たしていた。情報ニーズは、14点満点で平均値が12.6点（標準偏差1.9）であり、個別には、「子どもの発達に関する情報が知りたい」「将来利用できる福祉サービスに関する情報が知りたい」「子どもの障害に関する情報が知りたい」に関する、より専門的な情報ニーズの頻度が高かった。情報源の利用頻度は、専門家等のパーソナルメディア、その他のパーソナルメディア、マスメディアの順であった。また、情報源の評価は、その他のパーソナルメディア、専門家等のパーソナルメディア、マスメディアの順であった。情報源の利用と評価は密接に関連していた。

考察 専門家等のパーソナルメディアは、障害児の母親の情報ニーズの内容から判断すると、必ずしも十分な対応関係になく、今後、総合的かつ体系的な療育システムの一層の充実が望まれることが推察された。

キーワード 障害児、母親、情報源

I 諸 言

障害児家族、特に母親の育児に関連した情報ニーズ information needsについて構造化し、総合的に評価した研究はほとんど見あたらない。しかし、家族ニーズの一部としてそれらを扱った研究は1980年代後半から認めることができ^{1)~5)}、これらの研究では、障害児の母親が必要としている情報内容が、児の障害や発達、その将

来像、育児の具体的な方法、地域サービス等に集約でき、またそれら情報ニーズの頻度は他のニーズに比べて高いことが指摘されている。通常、情報ニーズを満たすためには情報探索行動 information seeking behavior⁶⁾⁷⁾を必要とするが、それは一般的には、友人や専門家、または各種マスメディアといった情報源を通して展開される。しかし、障害児の母親が育児情報を入力するためにどのような情報源を利用している

* 1 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科博士後期課程 * 2 同大学保健福祉学部教授

のか、さらには利用した情報源をどのように評価しているかについては、その実情すら把握されていない。障害児家族が児の短期的・長期的な育児プログラムを設計するためには育児情報は必要不可欠である。特に母親の育児負担感等のストレス⁸⁾⁻¹⁹⁾の高さを勘案するなら、前記情報ニーズに適宜、適切に応えるための相談システムの構築が早急に望まれよう。

本研究では、今後の障害児家族に対する療育相談の指針を得ることをねらいとして、障害児通園施設を利用している母親について情報ニーズと情報源の利用および情報源の評価の関係を明らかにすることを目的とした。

II 方 法

調査は、S県とW県の障害児通園施設を利用する児の母親515人を対象として、平成15年9月の1か月間に実施した。調査内容は、児の特性(性、年齢、療育手帳、障害者手帳)、母親の基本属性(年齢、児の数、家族構成、職業)、情報ニーズ、情報源の利用と評価で構成した。

情報ニーズは、「The Family Needs Survey」²⁰⁾のうちの「Needs for information」を構成している7項目で測定した(表1)。回答は、「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」の3件法(質問は「以下のニーズに関連した質問に対して、現在、あなたが必要と感じている気持ちについておたずねします」)で求め、回答選択順に2-1-0点と得点化した(得点の上限は14点)。

情報探索行動で利用される情報源は、従来の研究²¹⁾を参考に「マスメディア」と「パーソナルメディア」に大別し、さらに「パーソナルメディア」については障害児の療育にかかわりの深い専門家集団とそれ以外の集団に分け、合計3つの因子(13項目)で構成した(表2)。回答は、情報源の利用について「たびたび利用している」「時々利用している」「利用していない」の3件法(質問は「あなたが子育てに必要な情報を得るために以下の情報源をどの程度利用しているかおたずねします」)で、また情報源の評価について「かなり役に立った」「少し役に立っ

た」「全く役に立たなかった」の3件法(質問は「以下の情報源から得た子育て情報が、どの程度役に立ったと感じているかをおたずねします」)で求め、回答選択順に2-1-0点と得点化した(上限はそれぞれ26点)。

統計解析では、情報源の評価に対する一次要因を情報源の利用、二次要因を情報ニーズとする因果モデル(図1)を仮定し、そのモデルのデータへの適合度を検討した。このとき、情報ニーズは「Needs for information」7項目で構成される1因子モデル、情報源の利用と評価は情報源の下位因子に対応した3つの1因子モデルを想定した。前記モデルのデータへの適合度と各要素間の関連性は、構造方程式モデリングを用いて検討した。解析に際しては、相関係数の算出には多分相関係数行列²²⁾、パラメータの推定にはWeighted Least-Squares with Mean and Variance adjustment (WLSMV)²²⁾を採用した。適合度は、Comparative Fit Index (CFI)とTucker-Lewis Index (TLI)で評価した。CFIとTLIは0.95以上²²⁾であれば、そのモデルがデータをよく説明していると判断される。なお、この因果モデルの解析に先立ち、育児情報ニーズ、情報源の利用と評価に関連した因子モデルは、個別にそれらのデータへの適合度を検討した。解析結果における標準化係数(パス係数)の有意性は、非標準化係数を標準誤差で除した値を参考とし、その絶対値が1.96以上(5%有意水準)を示したものを統計学的に有意とした。以上の解析では、統計解析ソフトM-plus Ver2.01²²⁾を用いた。

前記の因子を構成する項目の内的整合性は、クロンバックの α 信頼性係数で検討した。さらに、因子別にみた情報源の利用と情報源の評価の違いは、平均値の差をt検定で解析した。そのときの平均値は、各因子の項目数を考慮して、各因子の総合得点を因子に所属する項目数で除することにより求めた。加えて因子内の利用頻度に関する差の検討も行った。

Ⅲ 結 果

本調査では、調査時点で障害児通園施設を利用して515人のうち、384人から回答を得た（回収率74.6%）。ただし、統計解析では、療育手帳または身体障害者手帳を所持し、かつ、児の特性と母親の属性および情報ニーズ等の回答が完全な269人を対象とした。

(1) 属性の回答分布

児の性別は、男児が184人（68.4%）、女児が85人（31.6%）であった。児の平均月齢は58.8か月（標準偏差11.8）で、範囲は24～82か月であった。また、所持している障害手帳の内訳は、療育手帳のみを所持する児は179人（66.5%）、身体障害者手帳のみを所持する児は43人（16.0%）、前記の2つの手帳を所持する児は全体の47人（17.5%）であった。母親の年齢分布は、平均が34.3歳（標準偏差4.7）で、範囲は19～45歳であった。

(2) 情報ニーズ、情報源の利用と評価に関する回答分布

1) 情報ニーズについて

母親の情報ニーズの回答分布は表1に示した。回答「そう思う」の割合（ニーズ項目別に算出したその回答の出現率）が高かった上位3項目に着目すると、「子どもの発達に関する情報が知りたい」93.7%、「将来利用できる福祉サービスに関する情報が知りたい」93.7%、「子どもの障害に関する情報が知りたい」91.8%であった。

母親の情報ニーズに関するモデルのデータへの適合度は、CFIが0.956、TLIが0.929であった。また、情報ニーズ7項目のクロンバックの

表1 母親の情報ニーズの回答分布 (n=269)

| 質問項目 | (単位 人, ()内%) | | |
|--|---------------|----------|----------|
| | そう思う | どちらでもない | そう思わない |
| X _{n1} 子どもの障害に関する情報が知りたい | 247(91.8) | 21(7.8) | 1(0.4) |
| X _{n2} 子どもの発達に関する情報が知りたい | 252(93.7) | 16(5.9) | 1(0.4) |
| X _{n3} 現在利用できる福祉サービスに関する情報が知りたい | 242(90.0) | 21(7.8) | 6(2.2) |
| X _{n4} 将来利用できる福祉サービスに関する情報が知りたい | 252(93.7) | 15(5.6) | 2(0.7) |
| X _{n5} 子どもの育児(家庭生活)の仕方に関する情報が知りたい | 206(76.6) | 54(20.1) | 9(3.3) |
| X _{n6} 子どもの教育方法に関する情報が知りたい | 201(74.7) | 57(21.2) | 11(4.1) |
| X _{n7} 子どもとの遊び方や話しかけ方に関する情報が知りたい | 214(79.6) | 45(16.7) | 10(3.7) |

表2 情報源の利用頻度に関する回答分布 (n=269)

| 質問項目 | (単位 人, ()内%) | | |
|-------------------------------------|---------------|-----------|------------|
| | 利用していない | 時々利用している | たびたび利用している |
| マスメディア | | | |
| X _{r1} インターネット | 179(66.5) | 68(25.3) | 22(8.2) |
| X _{r2} テレビ・ラジオ | 61(22.7) | 161(59.9) | 47(17.5) |
| X _{r3} 育児書・育児関連雑誌 | 116(43.1) | 134(49.8) | 19(7.1) |
| X _{r4} 新聞の育児関連記事 | 94(35.0) | 134(49.8) | 41(15.2) |
| パーソナルメディア① | | | |
| X _{r5} 医師や看護師 | 78(29.0) | 155(57.6) | 36(13.4) |
| X _{r6} 理学(作業)療法士 | 101(37.5) | 89(33.1) | 79(29.4) |
| X _{r7} 福祉専門職員(指導員やケースワーカー) | 178(66.2) | 60(22.3) | 31(11.5) |
| X _{r8} 保育士(教師) | 37(13.8) | 97(36.1) | 135(50.2) |
| X _{r9} 保健師や栄養士 | 196(72.9) | 60(22.3) | 13(4.8) |
| パーソナルメディア② | | | |
| X _{r10} 障害児を育児している友人・知人 | 35(13.0) | 101(37.5) | 133(49.4) |
| X _{r11} 自分の親または夫の親 | 95(35.3) | 83(30.9) | 91(33.8) |
| X _{r12} 自分の兄弟または夫の兄弟 | 174(64.7) | 72(26.8) | 23(8.6) |
| X _{r13} 配偶者 | 73(27.1) | 75(27.9) | 121(45.0) |

α信頼性係数は0.711であった。情報ニーズ得点の平均値は12.6点（標準偏差0.9）で、範囲は4～14点であった。

2) 情報源の利用頻度について

情報源の利用頻度に関する回答分布は表2に示した。回答「たびたび利用している」の割合（項目別に算出したその回答の出現率）が高かった上位3項目に着目すると、「保育士(教師)」50.2%、「障害児を育児している友人・知人」49.5%、「配偶者」45.0%であった。また、回答「利用していない」の割合（項目別に算出した出現率）が高かった上位3項目に着目すると、「インターネット」66.5%、「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」66.2%、「自分の兄弟または夫の兄弟」64.7%であった。

情報源の利用頻度に関するモデルのデータへの適合度は、「マスメディア」4項目でCFIが0.986、TLIが0.971、「パーソナルメディア①」でCFIが0.974、TLIが0.959、「パーソナルメデ

「マスメディア②」でCFIが0.955, TLIが0.888であった。また、情報源の利用頻度のうち、「マスメディア」4項目のクロンバックの α 信頼性係数は0.581, 「パーソナルメディア①」5項目の同係数は0.517, 「パーソナルメディア②」4項目の同係数は0.586であった。

情報源の利用頻度を、各因子における項目数を考慮したときの平均値でみると(表3), 「パーソナルメディア②」「パーソナルメディア①」「マスメディア」の順であり、t検定の結果, 「マスメディア」と「パーソナルメディア①」, 「マスメディア」と「パーソナルメディア②」, 「パーソナルメディア①」と「パーソナルメディア②」の間において統計学的に有意な差が認められた。加えて、各因子を構成している情報源別

に、その利用頻度の平均値をみてみると, 「マスメディア」については「テレビ・ラジオ」「新聞の育児関連記事」「育児書・育児関連雑誌」「インターネット」の順であり、t検定の結果, すべての項目間で有意差が認められた。また「パーソナルメディア①」は, 「保育士(教師)」「理学(作業)療法士」「医師や看護師」「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」「保健師や栄養士」の順であり, 「医師や看護師」と「理学(作業)療法士」間以外で統計学的な有意差が認められた。さらに「パーソナルメディア②」は, 「障害児を育児している友人・知人」「配偶者」「自分の親または夫の親」「自分の兄弟または夫の兄弟」の順であり, すべての項目間で有意差が認められた。

3) 情報源の評価について

情報源の評価に関する回答分布は表4に示した。回答「かなり役に立った」の割合(項目別に算出した出現率)が高かった上位3項目に着目すると, 「保育士(教師)」62.5%, 「障害児を育児している友人・知人」61.7%, 「配偶者」38.3%であった。また, 回答「全く役に立たなかった」の割合(項目別に算出した出現率)が高かった上位3項目に着目すると, 「自分の兄弟または夫の兄弟」62.9%, 「インターネット」62.5%, 「保健師や栄養士」61.7%であった。

情報源の評価に関するモデルのデータへの適合度は, 「マスメディア」4項目でCFIが0.995, TLIが0.990, 「パーソナルメディア①」でCFIが0.924, TLIが0.878, 「パーソナルメディア②」でCFIが0.999, TLIが0.997であった。また, 情報源の評価のうち, 「マスメディア」4項目のクロンバックの α 信頼性係数は0.665, 「パーソナルメディア①」5項目の同係数は0.551, 「パーソナルメディア②」4項目の同係数は0.605であった。

情報源の評価を各因子に

表3 情報源別みた利用頻度の平均値 (n=269)

| 質問項目 | 平均値 |
|-------------------------|------|
| マスメディア(4項目全体) | 0.70 |
| Xr2 テレビ・ラジオ | 0.95 |
| Xr4 新聞の育児関連記事 | 0.80 |
| Xr3 育児書・育児関連雑誌 | 0.64 |
| Xr1 インターネット | 0.42 |
| パーソナルメディア①(5項目全体) | 0.78 |
| Xr8 保育士(教師) | 1.36 |
| Xr6 理学(作業)療法士 | 0.92 |
| Xr5 医師や看護師 | 0.84 |
| Xr7 福祉専門職員(指導員やケースワーカー) | 0.45 |
| Xr9 保健師や栄養士 | 0.32 |
| パーソナルメディア②(4項目全体) | 0.99 |
| Xr10 障害児を育児している友人・知人 | 1.36 |
| Xr13 配偶者 | 1.18 |
| Xr11 自分の親または夫の親 | 0.99 |
| Xr12 自分の兄弟または夫の兄弟 | 0.44 |

注 得点化は, 0点: 利用していない, 1点: 時々利用している, 2点: たびたび利用している

表4 情報源の評価に関する回答分布 (n=269)

(単位 人, ()内%)

| 質問項目 | 全く役に立たなかった | 少し役に立った | かなり役に立った |
|-------------------------|------------|-----------|-----------|
| マスメディア | | | |
| Xm1 インターネット | 168(62.5) | 80(29.7) | 21(7.8) |
| Xm2 テレビ・ラジオ | 55(20.4) | 168(62.5) | 46(17.1) |
| Xm3 育児書・育児関連雑誌 | 112(41.6) | 125(46.5) | 32(11.9) |
| Xm4 新聞の育児関連記事 | 98(36.4) | 152(56.5) | 19(7.1) |
| パーソナルメディア① | | | |
| Xm5 医師や看護師 | 66(24.5) | 132(49.1) | 71(26.4) |
| Xm6 理学(作業)療法士 | 93(34.6) | 75(27.9) | 101(37.5) |
| Xm7 福祉専門職員(指導員やケースワーカー) | 163(60.6) | 59(21.9) | 47(17.5) |
| Xm8 保育士(教師) | 34(12.6) | 67(24.9) | 168(62.5) |
| Xm9 保健師や栄養士 | 166(61.7) | 75(27.9) | 28(10.4) |
| パーソナルメディア② | | | |
| Xm10 障害児を育児している友人・知人 | 31(11.5) | 72(26.8) | 166(61.7) |
| Xm11 自分の親または夫の親 | 92(34.2) | 95(35.3) | 82(30.5) |
| Xm12 自分の兄弟または夫の兄弟 | 169(62.8) | 66(24.5) | 34(12.6) |
| Xm13 配偶者 | 75(27.9) | 91(33.8) | 103(38.3) |

おける項目数を考慮したときの平均値は(表5),「パーソナルメディア②」「パーソナルメディア①」「マスメディア」の順であり,「マスメディア」と「パーソナルメディア①」,「マスメディア」と「パーソナルメディア②」,「パーソナルメディア①」と「パーソナルメディア②」の間において統計学的に有意な差が認められた。加えて,因子を構成している情報源別に,その利用頻度の平均値をみると,「マスメディア」については「テレビ・ラジオ」「新聞の育児関連記事」「育児書・育児関連雑誌」「インターネット」の順であり,「育児書・育児関連雑誌」と「新聞の育児関連記事」間以外において有意差が認められた。また,「パーソナルメディア①」につ

いては「保育士(教師)」「理学(作業)療法士」「医師や看護師」「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」「保健師や栄養士」の順であり,「医師や看護師」と「理学(作業)療法士」および「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」と「保健師や栄養士」間以外において有意差が認められた。さらに,「パーソナルメディア②」については「障害児を育児している友人・知人」「配偶者」「自分の親または夫の親」「自分の兄弟または夫の兄弟」の順であり,すべての項目間で有意差が認められた。

(3) 情報ニーズと情報源の利用および評価に関する因果モデルのデータへの適合度

著者らが仮定した因果モデル(図1)のデータへの適合度は,CFIが0.961,TLIが0.968で,すべての指標が統計学的にみて許容範囲にあった。なお,表1のXn1~Xn7,表2のXr1~Xr13,表4のXm1~Xm13は調査項目を識別する意味の記号として用い,またそれらは図1に示したYn1~Yn7,Yr1~Yr13,Ym1~Ym13として示した観測変数と対応関係にあることを意味している。

情報ニーズから情報源利用へのパス係数は,「マスメディア」に0.674,「パーソナルメディア①」に0.646,「パーソナルメディア②」に0.569の順になっていた。これらパス係数は統計学的に許容水準を満たしていた。

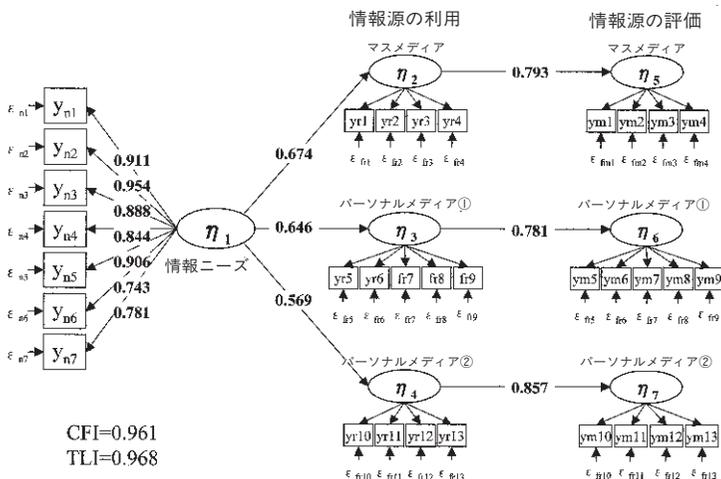
また,情報源利用から情報源評価へのパス係数は,「パーソナルメディア②」に0.857,「マスメディア」に0.793,「パーソナルメディア①」に0.781の順になっていた。これらパス係数は統計学的に許容水準を満たしていた。

表5 情報源別にみた評価度の平均値 (n=269)

| 質問項目 | 平均値 |
|-------------------------------------|------|
| マスメディア(4項目全体) | 0.71 |
| X _{m2} テレビ・ラジオ | 0.97 |
| X _{m4} 新聞の育児関連記事 | 0.71 |
| X _{m3} 育児書・育児関連雑誌 | 0.70 |
| X _{m1} インターネット | 0.45 |
| パーソナルメディア①(5項目全体) | 0.92 |
| X _{m8} 保育士(教師) | 1.50 |
| X _{m6} 理学(作業)療法士 | 1.03 |
| X _{m5} 医師や看護師 | 1.02 |
| X _{m7} 福祉専門職員(指導員やケースワーカー) | 0.57 |
| X _{m9} 保健師や栄養士 | 0.49 |
| パーソナルメディア②(4項目全体) | 1.02 |
| X _{m10} 障害児を育児している友人・知人 | 1.50 |
| X _{m13} 配偶者 | 1.10 |
| X _{m11} 自分の親または夫の親 | 0.96 |
| X _{m12} 自分の兄弟または夫の兄弟 | 0.50 |

注 得点化は,0点:全く役に立たなかった,1点:少し役に立った,2点:かなり役に立った

図1 障害幼児の母親の情報ニーズおよび情報源の利用と評価の関係



IV 考 察

本研究では、S県とW県の障害児通園施設を利用する児の母親を調査対象とした。ただし、調査地域が2つの県に限定されていたため、地域性と属性の点から研究調査の一般化に対して限界があることは否めない。しかし、障害児家族の情報ニーズに関連した従来の調査研究⁴⁾²³⁾⁻³¹⁾においては、標本数は少ないもので20~30人、最も多いものでも422人であり、本調査研究において、515人中384人の調査票が回収(回収率74.6%)できたことは、解析に必要な標本数がほぼ確保できたものと推察された。

その結果、情報源の評価に対する一次要因を情報源の利用、二次要因を情報ニーズとした因果モデルのデータに対する適合度は、統計学的に許容される基準値を満たすことが明らかになった。このことは、育児情報ニーズを起点に、メディアを媒体とした情報探索行動、すなわち意識されたニーズを満たすべく情報(メッセージ)を見いだすために個人的な活動が展開されることを意味し、さらに利用されたメディアに関する評価は、結果的には充足されるべく情報に対する有効性の認知(評価)を通してなされるといった一連の過程を想定できることを示している。しかも日常的には、障害児の母親は試行錯誤的な探索行動から入手できる情報の質の評価を繰り返しながら、適宜、適切により高次の情報探索行動の獲得をらせん的に拡大しつつ強固な情報ネットワークを確立していくものと推察されるが、この点については以下の結果を基礎に考察する。

本研究では、情報ニーズから情報源の利用頻度に向かうパス係数は、「マスメディア」「パーソナルメディア①」「パーソナルメディア②」の順になっていた。このことは、情報ニーズの多寡がほぼまんべんなく各種情報源を利用する、すなわち情報探索行動を引き起こす原因となり、そして「マスメディア」「パーソナルメディア①」「パーソナルメディア②」の順で、情報探索行動の生起が情報ニーズの多寡によって影響を受

けやすい状況にあることを意味している。ただし、情報ニーズの項目の内容に着目するならば、障害や発達、福祉サービスなどといった内容は、より専門的で高度な情報であり、本来、これらの情報は専門家に対して求められるべきものであるにもかかわらず、そうっていなかったことには議論の余地が残ろう。たとえば、専門家等で構成される「パーソナルメディア①」の項目別にみた利用頻度は、「保育士(教師)」が一番高く、次に「理学(作業)療法士」「医師や看護師」「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」「保健師や栄養士」の順であった。情報ニーズの内容から判断するならば、それら専門家の中でも、特に「医師や看護師」「理学(作業)療法士」「福祉専門職員(指導員やケースワーカー)」らが対応すべき内容が主たるものであるにもかかわらず、「保育士(教師)」が情報源として最も利用されていた。このことは、本研究の対象者が通園施設を利用している母親であることを考慮したとしても、本来対応すべき専門家に相談しにくい、あるいは相談しやすい環境が整備されていないものと推察され、このことは今後の療育相談システムのあり方に一定の示唆を与えているものと言えよう。

さらに、本研究では、情報源の利用頻度から情報源の評価へ向かうパス係数が、「パーソナルメディア②」「マスメディア」「パーソナルメディア①」の順になっていることが明らかになった。このことは、障害児の母親は様々な情報を得るために、たとえインターネットや雑誌等のマスメディア、医師や指導員等の専門家で構成されるパーソナルメディアを利用したとしても、得られる情報に必ずしも満足していないことを示唆していると推察される。「マスメディア」は利用のしやすさはあっても、必ずしも役に立つ情報が直接的に得られるものではないことは納得できる結果として解釈できるが、専門家等のパーソナルメディアの評価が特に高くなかったことは、大きな問題と言えよう。なお、利用状況とは異なり、利用頻度は低いものの、家族等の親しい人で構成されるパーソナルメディアが最も高い評価を受けていたことは、得られる情

報もさることながら、それらの人々にサポートされているという認知³²⁾の影響が評価結果に反映しているものと推察される。

以上の情報源の利用と情報源の評価に関する解析結果は、障害幼児の母親は試行錯誤的な探索行動から入手される情報の質の評価を通して、適宜、適切に、より高次な情報探索行動の獲得をらせん的に拡大していくものというよりは、いまだ試行錯誤的あるいはマンネリ化した情報探索行動にとどまらざるをえない状況におかれていることを示唆するものである。従来の研究によれば、障害児を養育している母親はそうでない母親に比べて育児負担感が高く、また精神的健康度も低下している頻度が高い⁸⁾⁻¹⁹⁾ことが指摘されている。また、最近の研究では、情報ニーズは育児負担感すなわちストレス認知に対する潜在的ストレス³³⁾として位置づけられている。このことは情報ニーズを個別に的確に解決することが、それら母親の健康の維持・増進にとって重要な鍵となることを意味している。この点を踏まえ、かつ本研究の結果を総合するなら、障害幼児を養育する母親の療育支援を適切に行うためには、専門家はあらためて母親が何を求めているか正確に把握し、それらに対し、具体的な情報提供を適宜、適切に行う相談システムを充実することが喫緊の課題と言えよう。

文 献

- 1) Sloper P, Knussen C, Turner S, et al. Factors related to stress and satisfaction with life in families of children with Down's syndrome. *J Child Psychol Psychiatry* 1991; 32(4) : 655-76.
- 2) Eheart BK, Ciccone J. Special needs of low-income mothers of developmentally delayed children. *Am J Ment Defic* 1982; 87(1) : 26-33.
- 3) Bailey DB Jr, Simeonsson RJ. Assessing needs of families with handicapped infants. *The Journal of Special Education* 1988; 22(1) : 117-27.
- 4) Bailey DB Jr, Blasco PM, Simeonsson RJ. Needs expressed by mothers and fathers of young children with disabilities. *Am J Ment Retard* 1992; 97(1) : 1-10.
- 5) Mclinden AE. Mothers' and fathers' reports of the effects of a young child with special needs on the family. *Journal of Early Intervention* 1990; 14(3) : 249-59.
- 6) Varlejs J. “情報の要求と探索：視点の変化”. 田村俊作訳. 情報の要求と探索. 東京：頸草書房, 1993; 107.
- 7) Savolainen R. The Sense - Making Theory ; Reviewing the Interests of a User - Centered Approach to Information Seeking and Use. *Information Processing & Management* 1993; 29(1) : 13-28.
- 8) Holroyd J, Brown N, Wikler L, et al. Stress in families of institutionalized and non-institutionalized autistic children. *J Community Psychol* 1975; 3 : 26-31.
- 9) Friedrich WN, McArthur D. Mental Retardation and stress on the parents : A contrast between Down's syndrome and childhood autism. *Am J Ment Defic* 1976; 80(4) : 431-65.
- 10) Wilton K, Renaut J. Stress levels in families with intellectually handicapped preschool children and families with nonhandicapped preschool children. *J Ment Defic Res* 1986; 30 : 163-9.
- 11) Virtanen TA, Moilanen IK, Ihalainen MM. What causes stress for mothers of children with MBD?. *Scand J Soc Med* 1991; 19(1) : 47-52.
- 12) Krauss MW. Child-related and parenting stress : similarities and differences between with mothers and fathers of children with disabilities. *Am J Ment Retard* 1993; 97(4) : 393-404.
- 13) Orr RR, Cameron SJ, Dobson LA, et al. Age-related changes in stress experienced by families with a child who has developmental delays. *Ment Retard* 1993; 31(3) : 171-6.
- 14) Kobe FH, Hammer D. Parenting stress and depression in children with mental retardation and developmental disabilities. *Res Dev*

- Disabil 1994 ; 15(3) : 209-21.
- 15) Sarimski K. Communication, social - emotional development and parenting stress in Cornelia - de - Lange syndrome. J Intellect Disabil Res 1997 ; 41(Pt1) : 70-5.
- 16) Roach MA, Orsmond GI, Barratt MS. Mothers and fathers of children with Down syndrome : parental stress and involvement in childcare. Am J Ment Retard 1999 ; 104(5) : 422-36.
- 17) Olsson MB, Hwang CP. Depression in mothers and fathers of children with intellectual disability. J Intellect Disabil Res 2001 ; 45(Pt6) : 535-43.
- 18) Lin YF, Chung HH. Parenting stress and parents' willingness to accept treatment in relation to behavioral problems of children with attention - deficit hyperactive disorder. J Nurs Res 2002 ; 10(1) : 43-56.
- 19) Harrison C, Sofronoff K. ADHD and parental psychological distress : role of demographics, child behavioral characteristics, and parental cognitions. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry 2002 ; 41(6) : 703-11.
- 20) Bailey DB Jr, Simeonsson RJ. Assessing needs of families with handicapped infants. The Journal of Special Education 1988 ; 22(1) : 117-27.
- 21) 佐藤秀紀, 中嶋和夫. 高齢者における在宅福祉事業に関する情報の利用と満足. 日本公衆衛生雑誌 1998 ; 45(3) : 240-50.
- 22) Linda KM, Bengt OM. Mplus User's Guide. Los Angeles.1989.
- 23) Mclinden AE. Mothers' and fathers' reports of the effects of a young child with special needs on the family. J Early Intervention 1990 ; 14 : 249-59.
- 24) Bailey DB Jr, Blasco PM. Parents' perspective on a written survey of family needs. J Early Intervention 1990 ; 14 : 196-203.
- 25) Bailey DB Jr, Blasco PM, Simeonsson RJ. Needs expressed by mothers and fathers of young children with disabilities. Am J Ment Retard 1992 ; 97 : 1-10.
- 26) Carolyn SC, Keith WA. A Comparison of Mothers' Versus Fathers' Needs for Support in Caring for a Young Child with Special Needs. Infant - Toddler Intervention 1992 ; 2 : 205-21.
- 27) Judith AG, Scott RM. Comparison of Family Needs Assessed by Mothers, Individual Professionals, and Interdisciplinary Teams. J Early Intervention 1993 ; 17 : 36-49.
- 28) Chen J, Simeonsson RJ. Child disability and family needs in the People's Republic of China. Int J Rehabil Res 1994 ; 17 : 25-37.
- 29) Leslis LB, Vanessa DF, Nancy LS, et al. Perception of Family Needs in Pediatric Oncology. Child Adolesc Social Work J 1994 ; 11 : 137-48.
- 30) Bailey DB Jr, Skinner D, Correa V, et al. Needs and supports reported by Latino families of young children with developmental disabilities. Am J Ment Retard 1999 ; 104 : 437-51.
- 31) Hendriks AH, De Moor JM, Oud JH, et al. Service needs of parents with motor or multiply disabled children in Dutch therapeutic toddler classes. Clin Rehabil 2000 ; 14 : 506-17.
- 32) 種子田綾, 林仁実, 中嶋和夫. 障害児の母親の育児コンボイと精神的健康度の関係. 子ども家庭福祉 2002 ; 創刊号 : 1-8.
- 33) Tunali B, Power TG. Creating satisfaction : a psychological perspective on stress and coping in families of handicapped children. J Child Psychol Psychiatry 1993 ; 34 : 945-57.